

日本語・ベトナム語・タイ語の受身対照比較

— 間接受身文を中心に —

谷 守 正 寛*

キーワード：間接受身，持主の受身，意識上のなわばり

1 はじめに

本稿では、日本語の受身，とりわけ，間接受身をベトナム語とタイ語で表した場合に，どのように文法的ふるまいの違いが生ずるかをみる。日本語ではこうした受身に関してはもっとも許容度が高く，広く表現されるとみられるのに対して，一般に外国語ではそのまま受身文としては表現できないことが多い。したがって，こうした文がどこまで比較言語において表現できるのかを見ると興味深いことが分ってくる。

なお，こうした特定のタイプについて深く比較した文献は管見にはなく，今後の研究に委ねられるところが大きい。本稿では，タイ語との比較については谷守・タンチット マティー(1998)，ベトナム語とのそれについては Lê thị thanh Hà (1999)を元にまとめ，問題点を明らかにしたい。そして，日本語そのものの特性もこれまで以上に詳細に浮かび上がってくるであろうし，さらに興味深いことに，背景にある表現する話者の意識の違いが文化的違いとして窺い知れる部分が若干あり，それを今回新しく概念化した。なお，韓国語との比較は別の機会に譲りたい。本稿では，とりあえず，ベトナム語とタイ語について日本語と比較・考察することにした。また，こうした研究によって，ベトナム語・タイ語を母語とする日本語学習者が日本語の受身をより深く認識し，自然に表現できるように役立てられれば幸いである。

2 受身文の構造

2.1 日本語の受身

日本語の受身文について直接受身も含めてごく簡単に確認しておこう。

2.1.1 直接受身

次の文を見られたい。

- (1) a. 彼は私を殴った。
- b. 私は彼に殴られた。

受身文(1b)では，元の能動文(1a)のヲ格で表示される直接目的語が主語に移動させられ，述語動詞

*日本語教育学

で表される行為を行った動作主が二格で表示される。そして、述語動詞に受身の助動詞レル／ラレルが付く。なお、二格で表示される直接的な目的語(「彼が私に惚れた」の「私」など)や同じく二格表示の副詞句中の要素(「彼が私に追いついた」の「私」など)、さらにはカラ格で表示される同じく副詞句中の要素(「彼が私から逃げた」の「私」など)なども受身文の主語にできる。このような場合も元の能動文から直接的に受身文に変換できるので、「まものの受身」という言い方もあるが、便宜上ここでは直接受身とする。したがって、常に直接目的語から受身の主語が由来するという意味ではないことに留意されたい。

2.1.2 間接受身

次の文を見られたい。

- (2) a. 太郎が花子の顔を殴った。
 b. 花子が太郎に顔を殴られた。
 (3) a. 帰宅中雨が降った。
 b. 私は帰宅中雨に降られた。
 (4) a. 彼が先に席を取った。
 b. 私は彼に先に席を取られた。

まず、(2a)の場合、ヲ格で表示される顔の持主である花子は(2b)の主語に移動する。これは、持主の受身である。顔は「殴る」という事態の成立に関与する必須構成要素であるのに対して(3a)(4a)では、述語動詞である「降る」や「取る」の表す事態や動きの成立に関与する必須構成要素として含まれない。すなわち、受身文の主語「私」は第三者として出現しているので「第三者の受身」と呼ばれる。この場合受身文の述語動詞では元の文に比べて必須の要素が一つ多いことになる。鈴木(1972)や小泉保他編(1989)では両者を含めて間接受身としているが、本稿でも同じく間接受身をこのようなものとして扱うことにする。なお、寺村(1982)に従って「XガYニZヲ〜ラレル(←YガXノZヲ〜スル)」におけるZとは、Xの身体の一部、肉親・縁者、所有物、占有する空間などまで含める。

2.2 ベトナム語とタイ語の受身構造

2.2.1 直接受身

ベトナム語・タイ語で能動文から直接受身文に変換する時、両言語とも能動文の直接目的語を受身文の主語に移動させ、受身の形態素 *bị*・*được*/*ถูก* をおいた上で動作主と述語動詞を埋め込む。以下、両言語の例文では、受身の形態素と、太郎 (*Ta rô*/*ทาโร*)、花子 (*Ha na kô*/*ฮานาโกะ*) の文中での位置関係を見ながら文構造を把握していただきたい。

- (5) a. 太郎は花子を殴った。
Ta rô đánh Ha na kô.
ทาโร ต่อย ฮานาโกะ
 b. 花子は太郎に殴られた。
Ha na kô bị Ta rô đánh.
ฮานาโกะ ถูก ทาโร ต่อย

(5b)の文構造を示すと次のようになる。

[花子 + 受身形態素 + [太郎 + 殴る]]
 ベトナム語 [Ha na kô + bị/được + [Ta rô + đánh]]
 タイ語 [ฮานาโกะ + ถูก + [ทาโร + ต่อย]]

したがって、直接受身に関しては両言語とも共通した構造を有している。なお、この場合ベトナム語では受身の形態素に bị しか使われないが、これについては後述する。

2.2.2 間接受身

まず、持主の受身の場合にはどうか例文を見られたい。なお例文は多く、谷守・タンチットマティー (1998), Lê thị thanh Hà (1999) から借用し、一部改変しているものもある。

(6) a. 太郎は花子の顔を殴った。

Ta rô đấm vào mặt Ha na kô.
 ทาโร ต่อย หน้าฮานาโกะ

b. 花子は太郎に顔を殴られた。

Ha na kô bị Ta rô đấm vào mặt.
 ฮานาโกะ ถูก ทาโร ต่อย หน้า

言うまでもなく、ベトナム語・タイ語の両言語ともに受身の形態素が使われており、受身と認定できる。日本語と同様に、元の能動文の直接目的語(日本語ではヲ格で表示される)の持主が切り離されて受身文の主語に移動される。残りの部分が、日本語ではレルの前に埋め込まれるのに対して、受身の形態素の後に埋め込まれる。(6b)の構造を示すと次のようになる。

[花子 + 受身形態素 + [太郎 + 殴る + 顔]]
 ベトナム語 [Ha na kô + bị/được + [Ta rô + đấm + mặt]]
 タイ語 [ฮานาโกะ + ถูก + [ทาโร + ต่อย + หน้า]]

もっとも、両言語には日本語のハ、ニ、ヲに当たる助詞がないので、タイ語については「文法的関係は主として文中の位置によって示される(松井 1998)」と言われ、また、ベトナム語についても同様である。また、時制については、タイ語では表さないが、ベトナム語でも厳密に表さなくともよい。なお、間接受身を直接受身で代替させる言い方については本稿では考察の対象とはせず、同じ類型どおしの比較にとどめたい。

3 三言語間の受身文比較

3.1 持主の受身の場合

上に見たように、ベトナム語とタイ語とでは文構造の面では類似しているにもかかわらず、一方が一定の条件下で日本語と似た性格を有することが観察できるのは興味深い。

次の持主の受身文を対応能動文とともに見られたい。

(7) a. 花子は太郎の顔を殴った。

Ha na kô đấm vào mặt Ta rô.
 ฮานาโกะ ต่อย หน้าทาโร

- b. 太郎は花子に顔を殴られた。
Ta rô bị Ha na kô đấm vào mặt.
ทาโร ถูก ฮานาโกะ ต่อย หน้า
- (8) a. 太郎は花子の服を破った。
Tarô xé quần áo của Ha na kô.
ทาโร ฉีก เสื้อของฮานาโกะ
- b. 花子は太郎に服を破られた。
Ha na kô bị Tarô xé quần áo.
ฮานาโกะ ถูก ทาโร ฉีก เสื้อ
- (9) a. 太郎は花子のノートを破った。
Ta rô xé vở của Ha na kô.
ทาโร ฉีก สมุดโน้ตของฮานาโกะ
- b. 花子は太郎にノートを破られた。
Ha na kô bị Ta rô xé vở.
ฮานาโกะ ถูก ทาโร ฉีก สมุดโน้ต

持主の受身「XガYニZヲ～サレル」におけるZに注目して文法性を確認する。(7b)–(9b)から分るように、ZがXの身体的に不離の部分、身に密接につけている物、Xと分離容易な持ち物のいずれであっても三言語とも表現可能である。これは、英語では(7b)以外は受身にならない点で大きく異なる性質である（英語ではhave/getなどの使役動詞を使う）。ただし、述語動詞によっては許容度が下がる場合も有り得るので、単純にZのXとの関係のみではルール化できない問題も残る。たとえば、タイ語では次の場合許容度が下がるようである。

- (10) 花子は太郎にめがねを壊された。

?ฮานาโกะ ถูก ทาโร ทำ แวนตา เสีย

これは「壊す」という動詞は物に対する作用を強く表し人間に対する行為を表し得ないからだろう。

次に、「XガYニZヲ～サレル」のZが抽象的なもの（価値、観念など）であればどうか見る。なお、本稿では、こうした性格のZであっても、便宜上、持主の受身とみなすことにする。

- (11) a. 社長が太郎の賃金を下げた。
Giám đốc giảm lương của Ta rô.
ผู้จัดการ ลด ค่าจ้างของทาโร
- b. 太郎は社長に賃金を下げられた。
Ta rô bị giám đốc giảm lương.
ทาโร ถูก ผู้จัดการ ลด ค่าจ้าง
- (12) a. 太郎が我々の秘密を暴露した。
Ta rô để lộ bí mật của chúng tôi.
ทาโร เปิดโปง ความลับของพวกเรา
- b. 我々は太郎に秘密を暴露された。
Chúng tôi bị Ta rô để lộ bí mật.
พวกเรา ถูก ทาโร เปิดโปง ความลับ

- (13) a. 太郎が花子のプライドを傷つけた。

Ta rô làm Ha na kô mất thể diện.

タロ हमिन ศักดิ์ศรีของฮานาโกะ

- b. 花子が太郎にプライドを傷つけられた。

Ha na kô bị Ta rô làm mất thể diện.

ฮานาโกะ ถูก ทาโร हमिन ศักดิ์ศรี

いずれも文法的である。この点で三言語とも類似した性格をもつと言えよう。

- (14) a. 太郎が花子の弱点を見つけた。

Ta rô phát hiện ra điểm yếu của Ha na kô.

タロ พบ จุดอ่อนของฮานาโกะ

- b. 花子が太郎に弱点を見つげられた。

Ha na kô bị Ta rô phát hiện ra điểm yếu.

ฮานาโกะ ถูก ทาโร พบ จุดอ่อน

興味深いことに、上のような動詞「見つける」といった相手に対して直接危害・変化等を加える動作でない行為を表す場合でも ((11)の「下げる」もややこれに相当するがマイナスの意味合いが感じられる点で「見つける」ほど中立的ではない)、両言語で許容される。

次例を見られたい。

- (15) a. 太郎は花子の音楽の才能を認めた。

Ta rô công nhận tài năng âm nhạc của Ha na kô.

タロ ยอมรับ พุทธวรรคทางด้านดนตรีของฮานาโกะ

- b. 花子は太郎に音楽の才能を認められた。

Ha na kô được Ta rô công nhận tài năng âm nhạc.

*ฮานาโกะ ถูก ทาโร ยอมรับ พุทธวรรคทางด้านดนตรี

タイ語では「受身は日本語に似て迷惑の意味も示す (松井 1998)」と言われるが、実は、受身文の主語にとっての利益を表す文は常に非文となると言うべきであろう。これは直接受身についても同じく言えることであって受身は常に迷惑・被害の意味を表す。一方、ベトナム語では日本語と同様に利益を表す受身は許容される。その場合 **được** が受身の接尾辞として使われるが、これは **được** が利益の獲得を含意する漢字の「得」に由来するためである。そして、ベトナム語で被害を表す場合は **bị** (被)を使用するが、これも漢字の意味からすれば納得できよう。日本語ではこうした受身には「嬉しいのは一つもなく、迷惑の感じが伴うものばかりである」(三上 1953)、あるいは、「普通なら結構なことなのだが、間接受身になると、それが迷惑なことになってしまう」(井上 1989)のであるが、「認める」や「誉める」のような意味的に本来明らかに結構なことを表す動詞であればその限りではなく、迷惑なことを表すわけではない。いずれにせよ、主語が利益を受けるか被害を受けるかによって言語形式的に弁別されるのは日本語では見られない特異な現象である。

ところが、なお、次例のように、ベトナム語でも主体者の利益を表す間接受身が非文になる場合がある。

- (16) a. 先生が太郎の子供を誉めた。

Thầy giáo khen con của Ta rô.

อาจารย์ ชม ลูก ของ ทาโร

b. 太郎は先生に子供を誉められた。

***Ta rõ được thầy giáo khen con.**

***ทาโร ถูก อาจารย์ ชม ลูก**

(17) a. 先生が私の絵を誉めた。

Thầy giáo khen bức tranh của tôi.

b. 私は先生に絵を誉められた。

***Tôi được thầy giáo khen tranh.**

上の間接受身は非文になるが、子供や絵に対する誉めるという動作主の行為が、主体者の教育・芸術的能力を間接的には対象とするものの、主体者自身よりもむしろ主体者の外部存在である子供や絵そのものに向けられていることと、子供や絵は上の例文で見た服やノートのように人物に密接に付随するものではないこと等が要因だろうと思われる。これは、(14)がベトナム語では許容されることから考えれば頷けよう。なぜならば、(14)の「弱点」は受身文の主体者に内在する密接に関わる要素であるからである。タイ語でも似た傾向が認められる。

実際、次の二文を比べるとより明確に違いが分かる。

(18) 私は先生に子供を叱られた。

***Tôi bị thầy giáo mắng con.**

(19) 私は先生にいたずらを叱られた。

Tôi bị thầy giáo mắng vì nghịch ngợm.

子供を叱ることとは対照的に、いたずらを叱ることは私自身を叱ることになるだろうが、子供の教育が悪いから私が叱られる、あるいは、(16b)のように子供の教育がよいから誉められるという発想もベトナム語にはないためにこうした間接受身で表し得ないのだろう。

「XガYニZヲ～サレル」のZとXとの関係自体は持ち物と同様であるが、子供が誉められたり叱られることによる親の利益・被害という観念が日本人に比べるとベトナム人には希薄なのかもしれない。つまり、誉められたのは独立した別個の人格者である子供自身であり、子供を自己と同一視する日本人の発想とは異なる側面を示しているとも言えよう。このように、日本語では他からの影響が主語自身に向けられていなくともそれによって間接的に被害や利益を受けた場合にも問題なく受身にできるという点ではベトナム語と異なりを見せる。

さらに視点を変えて観察すると徐々に文法性の違いが露呈してくる。能動文は省略する。

(20) 花子は太郎に無断でケーキを切られた。

***Ha na kô bị Ta rõ tự tiện cắt bánh.**

***ฮานาโกะ ถูก ทาโร ตัด เค้กโดยไม่ได้รับอนุญาต**

(21) 花子は太郎に無断でケーキを食べられた。

***Ha na kô bị Ta rõ tự tiện ăn bánh.**

***ฮานาโกะ ถูก ทาโร กิน เค้กโดยไม่ได้รับอนุญาต**

(22) 花子は太郎に先にケーキを食べられた。

***Ha na kô bị Ta rõ ăn bánh trước.**

***ฮานาโกะ ถูก ทาโร กิน เค้กก่อน**

これらは外見上は持主の受身と文構造が似ているが、ベトナム語・タイ語ともに許容されない。ケーキはいずれも花子のものとみれば持主の受身とみなされるが、同時に、谷守(1997)の考察のように、「無断で」や「先に」といた類の副詞句を導く句の要素から受身のガ格成分に昇格したとみれば、

従来から言う第三者の受身ともみられ、構造上こうした場合に両言語では文法性を失うことになる。次に、意味上の違いとして、ケーキは当然切ったり食べるものであるから、切られたり食べられたりしたことをそれほど強く被害として意識されないということも、ネイティブのインタビューから確認された。先にみた発想の違いと同様、こうした文化的違いがあるとすれば、許可や優先権を持たない者のある行為によって被害を受けたと強く感じるのが日本的意識のあり方の一つであるとも仮定できる。こうした被害を感じる意識上の領域を、本稿では「意識上のなわばり」と呼ぶことにする。なお、「先に」を含む受身(以下「サキニ類」と呼ぶ)でタイ語が許容する文については後述する。

次の二文を比べてみよう。

(23) 私は友人に車を無断で売られた。

Tôi bị bạn tự tiện bán xe.

(24) 私は家の前に無断で車を置かれた。

***Tôi bị ai đó tự tiện đỗ xe trước nhà.**

(23)の車は私の物であるのに対して、(24)のそれは明らかに私以外の第三者の人物の物である。したがって、前者は持主の受身であり車を失うことは重大な被害と認識されるが、後者は第三者の受身であり、家の前に車を置かれるだけでは明確に意識上のなわばりを侵されたとはみなされず、これを被害の受身に表すと非文法的になるわけである。

タイ語でも持主の受身であっても、次のような事態では意識上のなわばりを侵されたとみなされず、受身としては許容されない。

(25) 私は太郎に無断で車を使われた。

??ฉัน ถูก ทาโร ใช้ รถโดยไม่ได้รับอนุญาต

(25)の車は私のものであるが、やはり、太郎が使ったことを深刻に被害として表すことは自然ではない。こうした意識上のなわばりが言語表現の文法性に反映されているとすれば、きわめて興味深いことである。

さて、主体者の利益を表す(26)は、日本語では受身文とはならないので日本語教育上指導に注意を要する点である。

(26) *花子は太郎にケーキを食べられた。

Ha na kô được Ta rô ăn bánh tự mình làm ra.

言うまでもなくこの場合は「～てもらう」を補って「食べてもらった」と言わなければならない。

3.2 自動詞の受身の場合

日本語における自動詞による第三者の受身が、ベトナム語・タイ語で表現できるか見てみよう。

(27) 太郎は突然花子に來られた。

Ta rô đột nhiên bị Ha na kô tới nhà .

***ทาโร ถูก ฮานาโกะ มา อย่างกะทันหัน**

(28) 太郎は奥さんに自殺された。

***Ta rô bị vợ tự sát .**

***ทาโร ถูก ภรรยา มาต้วตาย**

(29) タベ私は先生に來られた。(→来てもらった。)

Tối qua tôi được thầy giáo tới nhà.

(30) 太郎は奥さんに死なれた。

Ta rô bị chết vợ.

上の場合、タイ語では表現できないのに対して、ベトナム語ではすべての自動詞についてというわけではなくとも表現可能なものがあるのは興味深い。なお、日本語では「来られた」は被害・迷惑を表し、利益を表す場合は「来てもらった」と表現するが、この違いがベトナム語では、**bị / được** という二つの受身辞の形式上の使い分けによって表現可能となる。動作主が先生なので、この場合利益の表現になる。

元の能動文のト格で表示される名詞句が受身文のガ格成分に昇格する場合をみよう。

(31) 太郎は花子に離婚された。

Ta rô đột nhiên bị Ha na kô li hôn.

***ท้าว ถูก ฮานาโกะ หย่า**

このように、日本語とベトナム語では受身にできるがタイ語ではやはりできない。

では、ベトナム語との比較をもう少し詳しくみよう。

(32) a. *花子は太郎に結婚された。

b. **Ha na kô được kết hôn với Ta rô.**

c. **Ha na kô bị kết hôn với Ta rô.**

(33) 花子は太郎に他の女と結婚された。

Ha na kô bị Ta rô kết hôn với cô gái khác.

ベトナム語でもト(**với**)格をとり、日本語と同じく「結婚する/離婚する」等は自動詞とみなしてよいだろう。とりわけ、(32a)は日本語では直接受身としては非文にもかかわらず、ベトナム語では受身として表現できる。(32b)は日本語では「結婚してもらった」、(32c)は「結婚させられた」の意になろう。日本語で(32a)が文法的になるのは、間接受身である(33)の意味の場合である。ベトナム語ではいずれも表現可能なのは興味深い。

なお、仁田(1997)では「戦う、結婚する～」の相互動詞はまものの受身(直接受身)を作らないと指摘されているが、「離婚する」に関しては、(31)のように、日本語・ベトナム語ともにこの限りではない。ベトナム語では「結婚する」についても受身文を作ることができるのが大きな違いであろう。

カラ格をとる自動詞の場合はどうであろうか。

(34) 花子は太郎に逃げられた。

Ha na kô bị Ta rô chuẩn mất.

***ฮานาโกะ ถูก ท้าว หนี**

「～から逃げる」のカラ格で表示される名詞句が受身のガ格成分(ここでは「花子」)に昇格している。やはりタイ語では非文となるがベトナム語では表現できる。

3.3 サキ二類の受身

上で、自動詞の場合にタイ語では表現できないことをみたが、サキ二類の受身についてみると必ずしもそういうわけではない。

(35) a. 亀は兎より先に山を越えた。

Rùa vượt qua núi trước thỏ.

เต่า ข้าม เขาไปก่อนกระต่าย

b. 兎は亀に先に山を越えられた。

Thỏ bị rùa vượt qua núi trước,
?กระต่าย ถูก เต่า ข้าม เขาไปก่อน

(35a)は谷守(1997)で仮定された対応能動文であるが、「～より先に」という副詞句の成分から受身のカ格成分に昇格してサキニ類の受身を作っている。これは、ベトナム語でも意識上のなわばりを侵されたことによる被害を表し、したがって、許容される。また、タイ語話者のインフォーマントによれば、若者を中心に若干言い得るようである。

さてここで再度、他動詞の受身にふれるが、タイ語でもサキニ類において、「XガYニZヲ～サレル」のYがZをXから物理的に奪ってXに被害をもたらしただけの場合には、持主の受身でなくとも文法的な文ができるのはきわめて興味深い。

(36) a. 太郎は私より先に車を使った。

Ta rô dùng xe ô tô trước tôi. (trước ~ = ~より先に/ tôi = 私)

ทาโร ใช้ รถ ก่อนฉัน (ก่อน ~ = ~より先に/ ฉัน = 私)

b. 私は太郎に先に車を使われた。

Tôi bị Ta rô dùng xe ô tô trước.
ฉัน ถูก ทาโร แยกใช้ รถ ก่อน (แยก = 奪う/ ใช้ = 使う)

タイ語でも谷守(1997)で観察したような現象がみられる。すなわち、「(～より)先に」が(36a)の「私」に前接し、「私」が受身文のカ格成分に移動後も、(36b)でも残存する(strand)ことである。そして「奪う」が受身辞とともに表れ、「車を先に奪われ使われた」という意味合いで受身を完成させている。(25)とは対照的である。言うまでもなく、ベトナム語でも表現可能である。

なおしかし、サキニ類の受身の中にも非文となるものが存在する。

(37) 私は太郎に先に同じアイデアを考えられた。

***Tôi bị Ta rô nghĩ mất cùng một ý tưởng trước.**

***ฉัน ถูก ทาโร คิด ความคิดที่เหมือนกันได้ก่อน**

ベトナム語・タイ語ともにこのタイプは非文となるが、これは次のような原因によると思われる。アイデアは、受身の主体者にとっては未だ占有されておらず、とりわけタイ語の「奪われて～される」という表現が示すように、Zは奪われる対象として成立していなければならないが、アイデアは未だ成立に至っていない。したがって、アイデアは主体者に考案されるまでは内在するものでなく、意識上のなわばりを侵されたという認識には及ばない。このように、対象物の性格も間接受身が表し得るかどうかが決まる要因となっている。この場合は、述語動詞が作成動詞の類であれば非文になると予想できる。

4 まとめ

本稿では、ベトナム語・タイ語と日本語の受身表現を対照比較して、日本語では広く許容される受身文に対応する両言語の表現がどの程度許容されるかを考察し、その使用条件・環境等を考察した。次に主な点をまとめる。

1. [XハYニZヲ～サレル]型の持主の受身については、ZがXの身体・内面の一部や行為、Xに密接に装着されたものまで、ベトナム語・タイ語ともに日本語と同様に表現できるが、Xから独立した人格や価値のある対象になると、非文になる。また、日本語での表現では通常被害・迷惑を表

すと感じられるのと異なり、両言語とも、意識上のなわばりが侵されたとみなさない、つまり、被害とみなしえない場合があり、そうした場合には受身表現は許容されなくなる。こうした文化的ともいえる文法以外の要因も働くことが確認された。

2. 自動詞について、タイ語では通常受身文にできない。これに対して、ベトナム語では表現可能なものもあり、ト格やカラ格を伴う自動詞の受身も表現可能であることが確認された。たとえば、「結婚される」といった表現は日本語では直接受身としては非文だが、ベトナム語では被害と利益のいずれの場合についても表現でき、さらに間接受身としても表現できる。これは、「(結婚)させられる」「(結婚)してもらう」といった日本語の意味にまで対応しているからであろう。なお、タイ語では利益を表す受身は作れない。

3. 「XハYニ先ニZヲ〜サレル」型の本稿でいうサキニ類によって、Xが優先権を奪われて被害や迷惑を受けたことを表す場合、日本語と同様、ベトナム語・タイ語でも表現可能な場合がある。ただし、作成動詞などの述語動詞が表す行為・出来事の実現する時点で作成されるZについてまでは、日本語とは異なり、表現できなくなる。

参 考 文 献

- 井上和子(1989):『日本文法小事典』大修館書店。
 小泉 保,船越道雄,本田晶治,仁田義雄,塚本秀樹(編)(1989):『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店。
 鈴木重幸(1972):『日本語文法・形態論』むぎ書房。
 谷守正寛(1997):「いわゆる間接受動文についての一考察」『鳥取大学言語文化研究』第2号,鳥取大学教育学部国語学研究室。
 谷守正寛・ラチャダー タンチットマティ(1998):「タイ語と日本語の受動表現小考」『鳥取大学言語文化研究』第3号,鳥取大学教育学部国語学研究室。
 寺村秀夫(1982):『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版。
 仁田義雄(1997):『日本語文法研究序説』くろしお出版。
 松井嘉和(1998):「日本語とタイ語」『新しい日本語研究を学ぶ人のために』玉村文郎(編),世界思想社。
 三上 章(1953):『現代語法序説』刀江書院。(1972年にくろしお出版から復刊)
 Lê thị thanh Hà (1999):「So Sánh Dạng Bị Động Giữa Tiếng Việt Và Tiếng Nhật (日本語とベトナム語の受身表現比較)」Graduation paper submitted in partial fulfillment of the requirement for the Degree of Bachelor of Arts (TEFL) at The Japanese Department, College of Foreign Languages, VNU, Hanoi.

(1999年6月10日受理)